

バーチャルウォーク

松尾芭蕉とあるく「奥の細道」 600里 150日 その2 須賀川~平泉

八柳 修之

須賀川 4月22日から29日滞在 江戸から368km 白河から32km

私の到着記録： 年 月 日

とかくして越え行くままに、阿武隈川を渡る。左に会津根高く、
右に岩城・相馬・三春の庄、常陸・下野の地をさかひて山連なる。

影沼といふ所を行くに、今日は空曇りて物影映らず。

須賀川の駅に等窮といふ者を尋ねて四五日とどめらる。

「白河の関いかに越えつるや」と問われて。

風流の 初めや奥の 田植え歌

注釈：白河の関を越えて耳にした鄙びた陸奥の田植え歌、それこそ詩歌の源流につながるもので、今度の旅中、本格的な奥州路にはいって最初に経験した風流であった。



浅香山・信夫の里 福島5月2日 江戸より458km 須賀川から90km

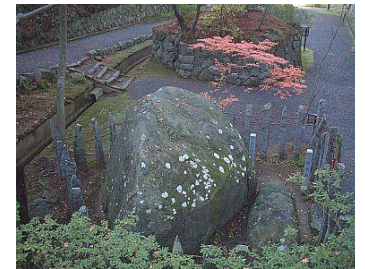
私の到着記録： 年 月 日

須賀川の等窮の家を辞してから五里ばかり、椴皮（ひわだ）の宿を出はずれ
て、歌枕に名高い浅香山がある。・・・二本松から街道を右に折れて、

その夜は福島に泊まる。翌日は、しのぶもじ摺りの石（歌枕、古代染色の
遺跡） 当時は石の面に文字があり、布を当てて草の汁で摺だした）を尋ね
て信夫へ

早苗とる てもとや昔 しのぶ摺り

もじ摺り石は今はこんなに下向きにつき落されてしまっていて、摺に衣の風流の行われた昔の風情を偲ぶ
よしもないが、おりから早苗とりの、古代以来の神聖な手わざにいそしんでいる早乙女たちの手つきは、さ
すがにそのかみ衣を摺り出したころの古代の乙女たちの手ぶりを偲ばせていることだ。



飯塚の里 5月2日 飯坂 472km 福島より14km

飯塚の里丸山、義経の忠臣として活躍をした佐藤庄司の城跡を訪ねる。

笈も太刀も 五月に飾れ 紙のぼり

注釈：五月の薫風に紙のぼりが勇ましくひるがえっている。この寺（医王院）
の寺宝とする弁慶の笈も義経の太刀も、端午の飾り物として晴れ晴れしく飾
り、そのかみの武勇の歴史を今の世に伝えるがよい。



笠島 白石 江戸から501km 飯坂から29km 私の到達記録： 年 月 日

白石の城を過ぎ、やがて笠島の郡に入った。かの藤中将実方（歌語りの世界で
第二の業平ともいう）の塚を五月雨で道が極度に悪く、体も疲れていた
ので遠くから眺めやっただけで通り過ぎた。

笠島は いづこ五月（さつき）の むかり道

注釈：折からの五月雨どきのこの泥んこ道に行き暮れている私たちにとって、
笠島という名も皮肉だが、実方朝臣、西行法師の思い出につながる笠島は、
行く手を阻むこの泥濘の向こうの、いったいどのあたりなのであろうか。



武隈の松 岩沼に宿す。岩沼：江戸から 532km 白石から 31km 私の記録： 年 月 日
武隈の松の素晴らしさには、目の覚めるような思いがする。・・・それにつけても何より先能因法師のことが思い出される。

桜より 松は二木（ふたき）を 三月（みつき）越し

注釈：江戸発足以来 3 月に及んで、君がせっかくあつらえてくれた遅桜の候は過ぎてしまったが、しかし、桜よりも何よりも、武隈の松こそは、古歌に詠まれ二木の見事な姿を、三月ごしに、確かにこの眼で見ることができたことだ。



宮城野 仙台 到着：5月4日（陽暦6月20日）仙台には4日間滞在する。

江戸より 551km 岩沼より 19km 私の到着日： 年 月 日
名取川を渡って仙台に入る。おりしも家々に端午のあやめを葺く日であった。宮城野の萩はみごとに茂り合って、古歌によまれた秋の景色のほどが思いやられる。一方、玉田・横野・つつじが岡は、折から古歌に見える馬酔木（あせび）の咲くころであった。



あやめ草 足に結ばん 草鞋（わらじ）の緒

注釈：端午の節句のおりにふれた、このあやめ草を思わせる鮮烈な紺の草履の緒。わたしはこのあやめ草を足に結んで、邪気を払い、勇んで旅に発足しよう。

東北一の大都会である伊達家 62 万石の城下に足を踏み入れた日がおりしもめでたい端午の行事にあたっていたことを強調した、大国に対する挨拶である。

壺の碑 市川村多賀城にある。訪問日：5月8日

壺の碑は仙台より塩釜へ抜ける途中にある。壺の碑は、高さ 6 尺余、横は 3 尺ばかり。碑文には「この城は、神亀元年（724）、按察使（あぜち、714 年に設置された地方行政の監督官）鎮守府將軍大野朝臣東人の設けたものである」と。これは聖武天皇の御代（701～756）にあたる。



末の松山・塩釜 壺の碑を訪ねたあと、その日、塩釜に到着。

塩釜：江戸より 594km 仙台より 43km 私の到着日 年 月 日
末の松山、沖の石、野田の玉川、おもわくの橋、浮島など巡っているが、いずれも歌を詠んでいない。翌早朝、塩釜の明神に参拝する。藩主正宗公が再建されて、社殿の柱は太く立派・・・かく神霊があらたかに鎮座ましますこそ、わが神国の美風なのだと、いかにも貴く拝された次第であった。



正午近く船を雇って松島に渡った。その間、海上二里余にして雄島の磯に着く。

松島 5月9日 江戸より 613km 松島より 19km

私の到着日： 年 月 日

そもそも、多くの先人たちの文藻（文才）に言いふるされていることではあるが、松島は日本第一の絶景であって、まずは中国の洞庭・西湖に比べても遜色がない。

松島や 鶴に身を借れ ほととぎす 曾良

注釈：すばらしい松島のながめ。折からほととぎす一声鳴きすぎた。

ほととぎすよ、この松島の絶景に対しては、お前の姿のままではふさわしくない。声はそのままに、



望むらくは、鶴の毛衣に身を借りて鳴き過ぎよ。 曾良はこんな句を作ったが、自分はどうと、待望の絶景に接して、もはや句をよむどころではなく、句作を断念して、さて眠ろうとしても、感激のあまり眠ることができない。陸奥の歌枕を代表する松島は、この旅における芭蕉の最大のもあての一つであった。

「奥の細道」の中に、芭蕉が松島のあまりにも絶景に接し、「ああ 松島や 松島や」と驚嘆したことには記されていない。

瑞巖寺 5月11日参拝する。

平泉へ向け発足。曾良の「随行日記」によれば松島を出発したのは5月10日、その夜は石巻（643km）12日に一の関（716km）13日に平泉を訪れている。

平泉 到着：5月13日（陽暦6月29日）、江戸より726km 仙台～平泉195km

私の到着日： 年 月 日

藤原三大の栄華もわずか一瞬の間の夢と過ぎ、今は廃墟と化した平泉の館の大門の跡は一里も手前にあって、往時の巨構を偲ばせている。秀衡の居館は田野となって、かれの築かせたという金鶏山のみが昔の姿をとどめている。何よりもまず義経の遺跡高館に登ると、突如として北上川が眼下の視野に飛び込んでくるが、これは遠く北のかた南部領より流れて来る大河である。……この高館の城に立てこもり、数々の功名もただ一時の夢と消えて、跡はただ荒れた草原となってしまっている。



義経の遺跡高館から北上川を望む



義経堂

「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」と杜甫の詩を口ずさみつつ、笠を敷いて腰をおろし、時刻の移るまで懐旧にくれたことであつた。

「夏草や 兵（つわもの）どもが 夢の跡」

「卯の花に 兼房みゆる 白毛かな」 曾良

注釈：芭蕉の句は注釈はいらぬであろう。それぞれ感じて下さい。曾良の句、折から真っ白く咲き乱れてる卯の花をながめていると、その白く咲き乱れた花の中から、義経悲劇の最後を飾った兼房の姿が彷彿として浮かんでくる。あの、真っ白にふりみだした彼の白髪が。

その後、中尊寺の経堂（清衡、基衡、秀衡の三将の像）光堂（三代の棺を納め、弥陀三尊の仏像を安置）を訪れる。

「五月雨の 降り残してや 光堂」

注釈：この寺の建てられて以後、500年にわたって年々降り続けてきた五月雨も、ここだけは降り残してであろうか、今、五月雨けむる空のもとで、光堂は燦然と輝き、かつての栄光を偲ばせていることだ。



毛越寺に新渡戸稲造の英文の芭蕉の句碑がありました。

The summer grasses , it is all that left of ancient warriors dream.

(注：芭蕉は日光までは特に寄り道をせず街道を歩いたようで距離は記録帖「奥州街道竜飛岬まで」と一致しますが、日光以降は街道を大きくそれたこともあり、記録帖「奥州街道竜飛岬まで」とは一致しません。白河以北、仙台北下まで「仙台道」、仙台以北盛岡間を「盛岡道」、盛岡以北を「松前道」と呼ぶこともある。日光以後の距離数は奥の細道を忠実に歩いた人（HP ENJOY WALKING）の記録によっています。歩幅 60 cm で毎日 1 万歩のウォーキングでも、ゴールには 1 年近くかかる長距離です。このあと芭蕉と曾良は出羽・山寺へと向かいます。 その 2 完